

中島岳志著 (2017)
『アジア主義—西郷隆盛から石原莞爾へ—』潮文庫

藤 田 昌 志

中島岳志著(2017)『亚洲主义—从西乡隆盛到石原莞爾—』潮文庫

FUJITA Masashi

【摘要】

19 世紀後半，歐美列強侵略亞洲的勢頭有增無減，亞洲主義就為了對抗歐美侵略行徑而展開的。中島岳志先生在本書中體系性地探討了從西鄉隆盛到石原莞爾的亞洲主義，同時對相關的學者竹內好和橋川文三也有所涉及。中島岳志先生在批判了社會進化論和單一論之後，摸索構建亞洲連帶的思想體系，他表示今後還將繼續果敢地在亞洲主義這個‘虎穴’之中前進下去。

キーワード：アジア主義 近代の超克 社会進化論 多一論 国民国家

1 序に代えて

アジア主義は 19 世紀後半に盛んになった欧米列強のアジア侵略（彼らはその植民地主義を文明を伝えるものと美化したが、基本的に、経済的利益の獲得を中心とし、政治的支配は二次的なものとした）に対抗する方策として展開されたものである。本書で中島岳志氏（以下、敬称略。）は西郷隆盛から石原莞爾まで包括的にアジア主義を検討し、関係する論者である竹内好や橋川文三の言説にも言及し、検討している。

2003 年 3 月 20 日、アメリカのイラク攻撃が始まった。沖縄で訓練を受け、翌年 4 月に普天間基地から飛び立っていったアメリカ軍の海兵隊員がファルージャの町に大量の爆弾を投下した時、中島は日米安保を超えてアジアと共に生きる道を選ばなければならないことを確信し、理屈を超えたアジア主義的心情が自分の中で確固たるものになり、「イラク戦争は、私にとって『アジア主義』を引き受ける覚悟と意思を決定的にした出来事だったので」⁽¹⁾とイラク戦争が「アジア主義」に主体的に取り組む契機であったことを述懐している。

欧米列強のアジアへの侵攻がアジア主義の萌芽であった。日本にとって、それは他人事

ではなく、アジアとの「連帯」や思想的な「近代の超克」（＝合理主義的認識論、社会進化論、相対主義の超克）、「侵略」が切実な現実的課題として、取り組まなければならない差し迫った問題として浮上したことを意味する。中島はアジア主義を日本の近代の歩み同様、全否定も全肯定もできないと言う。アジア主義のプロセスにおいて「日本とアジアの深い交流が生じ「思想としてのアジア」が構築された事実」⁽²⁾を重視し、その思想は「西洋近代に対する東洋からの巻き返しにおいて、きわめて重要な意味」を持つとして、「アジア主義の思想的可能性を追求していきたい」⁽³⁾と述べている。

2 中島岳志（2017）『アジア主義——西郷隆盛から石原莞爾へ』について

2.0

本書は序章から終章まで合わせると 21 章に及ぶ。2014 年 7 月に潮出版社より刊行された単行本を文庫化し、2017 年 2 月に初版発行されたものである。

序章 なぜ今、アジア主義なのか では 1. 序に代えて で引用した部分を含む中島のアジア主義へ向かう姿勢、決意が述べられている。

第一章～第十九章では竹内好の論文「日本のアジア主義」、西郷隆盛と征韓論、自由民権運動と玄洋社、金玉均、頭山滿、樽井藤吉の『大東合邦論』、天佑侠と日清戦争、宮崎滔天、孫文、岡倉天心、黒龍会、韓国併合、辛亥革命、大川周明、田中智学、石原莞爾、アジア主義の周辺—ユダヤ、エチオピア、タタール、日中戦争と大東亜戦争——などがテーマとして取り上げられている。**終章 未完のアジア主義** では「アジアの教訓と遺産」を振り返り、更に竹内好の「方法としてのアジア」を乗り越えることを提案し、岡倉天心らのアジア的「多一論」をアジアを「一つの世界」として構成してきたものとして高く評価し、既述のようにアジア主義の思想的可能性を追求していきたい⁽⁴⁾と述べている。

2.1 社会進化論と単一論

各章の詳細は本書を読んでいただきたいが、中島が批判するものとして①社会進化論②単一論がある。そのことについて以下、述べてみたいと思う。

まず①**社会進化論**について。19 世紀に活躍したイギリスの哲学者、スペンサーは生物や自然が進化を遂げてきたように人間社会も理想的な姿に向かって進化するという「**社会進化論**」を唱えた⁽⁵⁾。社会進化論は社会主義革命を正当化する論理に援用され、1880 年代、日本でもスペンサーブームといえる状況が生まれ、樽井藤吉『大東合邦論』もこのスペンサーの社会進化論に大きく影響を受けて、社会の段階は進化によって「世界統一」が成し遂げられるという見通しを説き、社会進化の先駆的取り組みとして、日本と朝鮮の対等合

邦を成立させるべきであると説いた⁽⁶⁾。(もっとも 1910 年に再版された『大東合邦論』の「再刊要旨」では、韓国併合を追認する論理を展開してしまっている (p.173)。

石原莞爾の「最終戦論」は日蓮仏法と融合した社会進化論で、石原は世界統一という理想社会を近未来に設定して、そのユートピア実現に向けた闘争を説いたが、石原のアジア主義は「不透明な多元性に耐えることができ」ず、ここに社会進化論の延長上に構築されたアジア主義の破綻が顕在化したと中島は述べている⁽⁷⁾。単一な一方向へ社会が進化するという単一論の謬論への中島の批判である。それは②単一論の批判へと続く。

②単一論の批判と多一論へのパラダイムの転換の必要性について。アジア主義には「合理主義的認識論に対する根本的な批判が含まれて」いて、それが岡倉天心、南方熊楠、柳宗悦、西田幾多郎、鈴木大拙らが構想してきた「多一論」である⁽⁸⁾と中島は言う。「多一論」とは「バラバラでいっしょ」という考え方で単一論の対極にあるものとして中島は考えている。岡倉天心の「アジアは一つ」というかつて政治に利用された言葉は、正確に言えば「アジアは多にして一つ」となり、アジアには中国、インド、日本といった個性豊かな文化が存在し、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、儒教といった複数の宗教が存在し、それらはバラバラに見えて、実は唯一の真理を内包していて、「多は一であり、一は多である」というアジアが発信する不二元論の世界観だというのが天心の強い主張であり、そうした^{にしていち}(二而一という)アドヴィダ(=不二元論)に基づくヴィジョンは、ヴィヴェーカーナンダ(天心がカルカッタで会った宗教指導者)によって教示されたと同時に、天心自身が以前から老荘思想を通じて体得していた思想である⁽⁹⁾と中島は述べている。

2.2 第二章 西郷隆盛と征韓論 について

中島は 終章 未完のアジア主義—いまアジア主義者として生きること で「アジア主義の教訓と遺産」を振り返り①「王道」と「霸道」をめぐる問題②感情的な「抵抗としてのアジア主義」の問題③「思想としてのアジア主義」の問題—の三つに分けて論じているが第二章 西郷隆盛と征韓論 は①の「王道」と「霸道」をめぐる問題に関する章の一つである。

朝鮮の「皇」の字のための「書契」(=後日の証として書きつけられたもの。またその文字。)の受け取り拒否により「征韓論」が日本国内で台頭し、日本は朝鮮問題の解決のためには清との対等外交関係の樹立が先決と判断し、1871 年に対等平等な日清修好条規を締結したが、西郷の朝鮮への使節派遣をめぐって明治 6 年の政変が起こる。毛利敏彦(1978 年)『明治 6 年の政変の研究』有斐閣 は西郷征韓論者全面否定論を主張し、西郷は平和的、道義的交渉論を展開したとするもので、中島は「西郷の「使節派遣論」を政府主流派が歩

んだ「反革命」という文脈でとらえると、「霸道」的な「征韓論」となって浮かび上がって」くるが、一方、「永久革命のシンボル」という文脈で捉えると、「王道」的な連帯論となって現れる、これが竹内好の提議した「西郷という問題」であり「アジア主義の課題」である⁽¹⁰⁾と述べている。竹内好は西郷を「永久革命のシンボル」と見るか、「反革命」と見るかといった視点を「解説 アジア主義の展望」⁽¹¹⁾で提出しているが、竹内好について、中島は竹内好はアジア的価値に実態はないと言い「方法としてのアジア」を唱えたが、思想的アジア主義の価値を掘り下げることができなかった⁽¹²⁾とし、そこに「竹内の限界」を見いだしている。竹内好という人は問題提議はするが、「言いつばなし」で問題解決のために地道な研究をするといった人ではない。『魯迅』で「幻灯事件」が魯迅の「文学への転向」のきっかけではないと執拗に繰り返したが、その証拠は何も述べていない。このことには多くの魯迅研究者が疑問を持ち、魯迅研究者の代田智明氏も随分悩んだ^{しろたともはる}ということを述べている。

「王道」と「霸道」については、孫文の1924年（大正13）11月28日、神戸での講演「大亜細亜問題」が有名で、日本は西方の「武力で他者を圧迫する文化」＝「霸道」の手先となるのか、東方の「感化することを本質とする、仁義・道徳に基づく文化」＝「王道」の防壁となるのか、と孫文は日本に問うた（pp.394—400）。もっとも、孫文も「滅満興漢」から「五族共和」＝「中華民族」の創出へ辛亥革命後、目標転換し、日本の援助と引き換えに「満州」權益を日本に渡すという従来の姿勢を変えていった。そのことにより「満州」に固執する日本との間に齟齬が生じていった。孫文はソ連を高く評価し、「王道」国家であると1925年の講演でも述べている（pp.397月—398）から、日本との関係は更に懸隔ができるものとなっていった。日本は孫文の後継者、蒋介石を相手にせず、軍閥支援などを行い、日中関係は泥沼化していく。

孫文の変貌について、その日本への影響はあまり大げらに述べられず、1924年の講演「大亜細亜問題」における、日本は「王道」を行くのか「霸道」を行くのかという孫文の言辞だけクローズアップされることが多いが、現実はそのような単純な二分法で片づくものではない。譚璐美（2017.10）『近代中国への旅』白水社は、広東人の孫文には革命支援の資金援助と引き換えに、日本に対して「満州租借」をすることなど、痛痒を感じないことであつた、なぜなら「そんな土地は広東人にとって、ちっとも惜しくない」からである（譚璐美（2017.10）p.151）と述べている。革命運動は決して一枚岩ではなく、湖南派と広東派、それに浙江派も加わり、中国同盟会の結成当初から争いは絶えず、辛亥革命の成功後まで尾を引き、とりわけ湖南派と広東派の派閥争いは湖南省出身の毛沢東や劉少奇の時代まで延々と繰り返された（同 p.184）。「武昌蜂起」に孫文は一切関知しておらず、それは湖

南派のもたらした成功であった(同 p.190)。こうした指摘から中国の「省」という「地域」が、ひとつの「国」のような存在であったことが理解できる。中国崇拜派の日本人は、かつてこうした中国の実態を冷静に見ようとしなかったし、今は逆に、少しでもケチをつけて、下に見ようとする中国全面批判派の輩が多すぎる。どちらも真実からは程遠い。日本人は「排外」か「排外」のどちらかしか、外国に対する態度を採れないようである。

2.3 第三章 なぜ自由民権運動から右翼の源流・玄洋社が生まれたのかについて

第三章は 1874 年 1 月の「民撰議院設立建白書」をきっかけに始まったデモクラシー運動である自由民権運動と玄洋社をテーマにして、国民主権、国民国家、ナショナリズム、天皇(制)の関係(性)について考察している。

1789 年のフランス革命によって身分制度と絶対王政が批判され、国民主権の原則が導入された。「国家は国王のものである」という考えから「国家は国民のものである」(=国民主権)という考え方への転換がなされたフランス革命は「国民国家」(ネーション・ステイト)の生みの親であり、新しい国民意識(=国民主権)に基づくナショナリズム運動であった。ナショナリズムは 20 世紀のアジア・アフリカの独立運動にもみられ、ナショナリストは欧米の帝国主義的支配からの独立を叫び「国民主権」の実現を勝ち取るための闘争を行った。ナショナリズムは「愛国」を基礎とし、自由民権運動の闘士は「民権を訴えたのに愛国を唱えた」のではなく、「民権を訴えたからこそ愛国を訴えた」のであり、事実、彼らは 1874 年 4 月 12 日「愛国公党」を結成し、翌年、「愛国公社」創立大会を開いて、運動の全国展開と各結社の連帯を目指したのであった⁽¹³⁾。もともと、現在では「国民主権」に基づく「国民国家」のエゴの超克も視野に入れなければならない地点に我々は立っている。

フランス革命ではアンシャン・レジーム(旧体制)を崩壊させ、ルイ 16 世をギロチンにかけ、その存在を否定したのに対して、日本では「君主」の存在が前面に出され、「一君万民」の原則をテコにして封建的な専制政治の打倒を訴えた。それは日本型デモクラシーを支えた原理であり、右翼の源流とされる玄洋社は「天皇」「ナショナリズム」(=愛国)「国民主権」という三つの原理を根本原則とした⁽¹⁴⁾。中島は、玄洋社は「民権論」から「国権論」へ「転向」したのではなく、民権論と国権論は不可分なものとして展開され、三つの原理を貫き通したそのこと自体のゆえに、その論理から帝国主義的要素が芽生えてきた⁽¹⁵⁾と述べている。問題はナショナリズムで、国家の超克をどう位置づけるかにあるのかもしれない。アジア主義には負の面だけではなく、正の面、国家の超克の面があったのではな

いだろうか。そこに中島の視点がある。それは橋川文三氏が超国家主義に対して持った視点に通じるものである。

2.4 国家を超えるもの

超国家主義を国家を超えるものを志向した主義と考えたのは橋川文三であった。中島は多一論的アジア主義を主張するが、「一つのアジア」という政治的統合を志向せず、国民国家を超えた「アジア統合」「連邦国家としてのアジア」を目指す一部のアジア共同体の潮流には反対している⁽¹⁶⁾。何故かという、それは必ず他者に対する同一化や価値の強制が生じるからだという。リベラルな諸制度を維持するために、当面、国民国家という枠組みは有効だとする中島は、国民国家の範囲やナショナル・アイデンティティの枠組は伸縮するから、それらは固定的なものではない⁽¹⁷⁾と過激な急進主義は採らないものと見受けられる。

3 結び

終章の最後で中島は次のように述べて自らの抱負を表明している。「現在のような東アジアの不幸な状況を打破し、アジアの連帯を構築するためには思想が必要です。そして、それは歴史の中に埋もれています。/虎穴に入らずんば虎子を得ず——。/私はアジア主義という「虎穴」の中を果敢に進んでいきたいと思います」⁽¹⁸⁾。

グローバリゼーションがアメリカナイゼーションに墮し、多元論が単一論に圧倒され、拝金主義が世界を席捲するとき、董仲舒^{とうちゆうじよ}の天人相関説の具現化かと思われるような大雨、洪水が梅雨時期、夏季に猛威を振るい、自然災害、人的被害が勃発する日本の現状（2018年12月現在）で、近現代の歴史を比較文化学の視点から再検討する必要があることを痛感する。アジア主義も日本からの視点とともに、アジア各国からの視点も視野に入れる必要があるであろう。国際化時代の研究とはそうした双方向のものであろう。かつて「西学東漸」に対して「東学西漸」を説いたのは岡倉天心であったことを想起されたい。（岡倉天心（1894年（明治27））「支那の美術」参照。）

〔注〕

- (1) 中島岳志（2017）p.15。
- (2) 中島岳志（2017）p.587。
- (3) 中島岳志（2017）p.588。
- (4) 中島岳志（2017）p.587。

- (5) 中島岳志 (2017) p.168。
- (6) 中島岳志 (2017) pp.168—169。
- (7) 中島岳志 (2017) pp.477—478。
- (8) 中島岳志 (2017) p.577。
- (9) 中島岳志 (2017) pp.274—275。
- (10) 中島岳志 (2017) p.84。
- (11) 竹内好編集 (1963) p.63。
- (12) 中島岳志 (2017) pp.576—577。
- (13) ここまでの記述は中島岳志 (2017) pp.85—99 による。
- (14) 中島岳志 (2017) pp.100—104 による。
- (15) 中島岳志 (2017) pp.100—105。
- (16) 中島岳志 (2017) p.579。
- (17) 中島岳志 (2017) p.579。
- (18) 中島岳志 (2017) p.587。

【引用文献・参考文献】

- 中島岳志 (2017) 『アジア主義——西郷隆盛から石原莞爾へ』 潮出版社 潮文庫 な-1
竹内好編集 (1963) 『現代日本思想体系 9 アジア主義』 筑摩書房
譚璐美 (2017) 『近代中国への旅』 白水社
岡倉天心 (1894 年 (明治 27)) 「支那の美術」 東京美術学校校友会誌『錦巷雜綴』所収